

I 調査の設計と概要

1 調査の設計に係る基本的な考え方

(1) 調査の目的

ア（調査の内容）全ての杉並区立学校児童・生徒に、幼児教育を基礎とした義務教育を通じ、学び方を本質とした人生と社会の基盤となる学力を確実に育む観点から、①基礎的・基本的な知識及び技能の習得状況、②知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成状況、③主体的に学習に取り組む態度や個性を生かした多様な人々との協同に関する自己意識等を把握する。

イ（結果の活用）調査結果は、公教育の持続的な構造転換を実現するための基礎研究の一環として、①児童・生徒が自らの学びを振り返り、成長の糧とすること、②教員が教授・支援・共同探究や評価の行為を省察し、多様な人材との協働や施設・設備の応答性を基盤に個別に選ぶ・探究に浸る・協同して共に生きる系統的で連続的な学びの実現を図ること、③教育行政が行財政施策としての人材と組織、施設・設備等から支援する学びを評価し、実情に応じた学校づくりと学びを通じた共治のまちづくりを支援すること等に活用する。

(2) 調査の対象・方式、内容

ア 対象・方式

対象	方式
小学校第6学年児童、中学校第3学年生徒	悉皆

※ 特別支援学校及び小・中学校の特別支援学級在籍の児童・生徒のうち、①下学年の内容などに代替して指導を受けている場合、②知的障害である児童・生徒に対する教育を行う特別支援学校の教科の内容の指導を受けている場合は、対象としないことを原則とする。

イ 内容

名称	内容
特定の課題に対する調査 (教科等に関する調査)	国語科、算数・数学科、外国語 ・学習指導要領に準拠し、当該教科等における①調査実施の前学年の目標・内容(事項)を出題趣旨とし、②本質知に迫る学習活動に即した出題内容と回答形式、採点規準による設問から構成 ※各教科の1単位時間に位置付けて実施
意識・実態調査 (学習・生活についてのアンケート)	自己意識、生活実態、学習状況 ・①【自己効力感】【他者への/からの受容】や【集合的効力感】等の自己意識、②【基本的な生活習慣】による生活実態、③【学び方】【個別/探究/協同の学び】等の学習状況を観点とした自己評価項目から構成 ※学級活動の1単位時間等に位置付けて実施

(3) 学習指導要領に準拠した【系統性】の理解に基づく【連続性】を確保した設問

ア 出題趣旨の決定と設問レベルの設定

教科等に関する調査の設問は、第一に、義務教育 9 年間を通じた目標・内容(事項)の【系統性】と学習評価の観点に基づき、出題趣旨と設問レベルを決定する。

基礎 C と B として設定する設問は、100%の(準)通過率を目標とする、つまり、全児童・生徒に確実に習得させる「基礎的・基本的な知識及び技能」を出題趣旨とする。活用 A や S は、全児童・生徒により一層の育成を目指す「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等」を出題趣旨とする。

設問レベル		出題趣旨		全設問に占める割合
活用	活用 S	調査実施の 前学年の 目標・内容 (事項)	自ら探究する能力	35%程度
	活用 A		思考力・判断力・表現力	
基礎	基礎 B		主として基礎的・基本的な技能	65%程度
	基礎 C		主として基礎的・基本的な知識	

イ 出題内容と回答形式、採点規準の設定

第二に、趣旨とレベルを踏まえ、学習指導要領が定める目標・内容(事項)を系統的に実現し、見方・考え方を中核とした学び方を育む【連続性】を確保した学習活動によっておのずと(準)通過できるよう、出題内容と回答形式、採点規準を設定する。

〔(設問の例)中学校第3学年外国語「聞いた話の要点をメモする」設問〕

- 出題趣旨：エ 書くこと(ウ) 聞いたこと・読んだことについてメモをとること
【思考・判断・表現】
- 設問レベル：活用 S(「自ら活用できる」状況で(準)通過できる設問)
- 出題内容：(リスニング)これから、スピーチを読みます。その後、2つの質問をします。スピーチ文と質問は通して2回読みます。〔中略〕スピーチを聞きながら、メモ欄に必要なメモを英語で書きなさい。
- 回答形式：記述
- 採点規準：複合条件(設定複数の条件のうち、満たした条件数で(準)通過を評価)
- 見方・考え方を中核とした学び方を育むコミュニケーション活動の展開例：

学習活動	○指導事項 ☆留意点	学習活動に即した具体的な評価規準【観点】(方法・材料)
3 空港でのアナウンスを聞き、搭乗に必要なことを英語でメモする。 〔以下はメモの視点例〕 ・ゲート ・搭乗の開始時刻 ・出発時刻 等	○聞いたことについて(英語で)メモをとること。 ☆スペリングミスにこだわらず、文の流れに乗ってメモをとるように促す。	・うまく書けないところがあっても、聞いたことを英語でメモし続けようとしている。 【主体的に学習に取り組む態度】 ・聞いたことを英語でメモしている。【思考・判断・表現】 (観察・メモ)

2 調査結果に基づく学習状況の評定、結果の取扱いと活用

(1) 学習指導要領に準拠した設問レベルに基づく学習状況の評定

教科等に関する調査の結果は、基本統計量として、平均正答率やその標準偏差、(準)通過数分布、設問ごとの(準)通過率を算出するとともに、下表の考え方にのっとり、調査実施の前学年の学習状況を、目標＝学習指導要領に準拠して5段階に評定する(以下、「学習状況の評定」若しくは「学力段階」という。)。これは、「測定結果の10%程度は誤差」という紙面を用いた学力測定的一般性質を踏まえ、尺度設計を「連続」から「順序」へと転換、学力・学習状況を「段階評価」しようとする取組である。

目標に準拠した段階評価の導入により、①義務教育における学びの到達水準を具体的な設問を通して一定程度明らかにできる、②調査結果と実際の学力・学習状況の対応関係に対するアカウントビリティが向上するなどの効果が期待でき、③集団や個に応じた改善方策がより一層明確になる。さらに、④取組の成果や課題を、他集団との比較や競走、すなわち集団に準拠した相対評価によらず目標＝学習指導要領に準拠して絶対的に評価できるようになり、これによって本調査は、「杉並区教育ビジョン2012」が志向する共創のための「コミュニケーションツール」となる。

	活用Sの設問群を(おおむね)通過	R5
	活用Aの設問群を(おおむね)通過	R4
最低限の到達目標⇒	基礎Bの設問群を(おおむね)通過	R3
	基礎Cの設問群を(おおむね)通過	R2
	基礎Cの設問群を(おおむね)通過できない	R1

(2) 各学習状況の評定の趣旨

学習指導要領の実現状況を意味する5段階の学習状況の評定(学力段階)の趣旨は、小学校段階での3段階の評定に即し概括した場合と合わせ、以下のとおりである。

“R3”は、「最低限の到達目標(水準)」と換言できる。R3の評定基準の算出には基礎CとBの設問を用いており、C・Bの設問は、義務教育9年間で全児童・生徒に確実に習得させる「基礎的・基本的な知識及び技能」を出題趣旨とするからである。

状況段階	評定の趣旨		3段階評定に概括した場合
R5	調査実施の前学年の目標・内容(事項)	発展的な力が身に付いている	3
R4		十分定着がみられる	
R3		おおむね定着がみられる(最低限の到達目標)	2
R2		特定の内容でつまずきがある	1
R1		学び残しが多い	

(3) 結果の取扱いと活用

ア 結果の取扱い

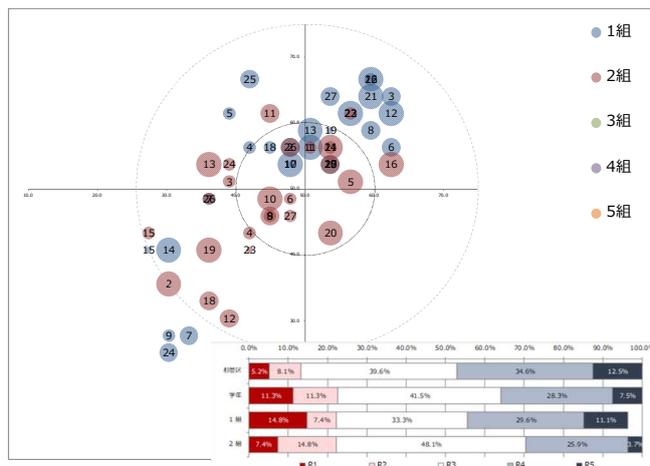
調査結果は、実施教科等が限られていることや、児童・生徒の自己評価によるものであることなどから、あくまで、学力・学習状況の一部分を紙面によって測定したものと捉える必要がある。とりわけ連続尺度上の1単位(得点1点や正答率1%)の差は、測定誤差を考慮すれば、教育的に意味のある学力差でない可能性が高い。

イ 結果の活用

結果の活用に当たっては、上述を踏まえ、本調査の主たる役割を「学力・学習状況を目標＝学習指導要領に準拠しておおまかに段階分けする」ことと捉える必要がある。それゆえ最も重視すべき指標は学習状況の評定(学力段階)であり、その結果はさらに、日常的な観点別学習状況をはじめ様々な教育情報と併用することが望ましい。付言すると、本調査の正答率は「参考指標」としてのみ算出しており、連続尺度を仮定し正答率そのものを「代表指標」にする学力調査とは根本的に設計が異なる。

また、調査結果は、クロスバブルチャートやヒートマップに処理したものも合わせて参照し、学年や校種、学校と地域を超えた協働に活用することが期待される。

[クロスバブルチャート：学力分布と意識・実態調査の回答を重ね合せた例]



- 左図は、横軸に「国語科」、縦軸に「算数・数学科」の標準化得点を取り、「学校の先生は自分のことを認めてくれていると思う」項目に肯定的に回答している個ほどバブルサイズが大きくなるよう処理した「クロスバブルチャート」である。
- バブル内の数値は一人一人の「出席番号」を表しており、各軸の教科等とバブルサイズに表す質問項目は校務情報端末上で動的に選択できるようにしてある。
- 直観的に、否定的な回答をしている個が中下位層に分布している様子が分かる。学力段階(右下)を合わせて参照することで、学年や学級、個々の状況の理解が促進する。

[ヒートマップ：児童・生徒数を指標に学校規模(小学校)を表現した例]



- 左図は、児童・生徒数を指標に「学校規模(小学校)」を表現した「ヒートマップ」である。杉並区の地図を背景とし、相対的に規模が大きい/小さい学校が立地する地域ほど色が赤く/青くなるよう処理してある。
- 「特定の課題に対する調査(教科等に関する調査)」のみならず、「意識・実態調査(学習・生活についてのアンケート)」の結果もその多くをヒートマップ化して学校に提供している。
- 活用の際には、赤/青の色付けが杉並区立学校における相対的な高/低であることを踏まえるとともに、様々な要因を「学校・地域の強み」に読み替える視点をもち、立場を超えたコミュニケーションのツールとなることが期待される。

3 調査の概要

(1) 調査期間

令和4年5月10日(火)から12日(木)までの1日を、各学校が選択して実施

(2) 調査を実施した児童・生徒数、学校数

	小学校			
	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
児童・生徒	対象学年としない			3,362人
学校	対象学年としない			40校

(3) 各調査の設問数

ア 特定の課題に対する（教科等に関する調査）

①国語科 ※全体に占める設問割合を（ ）内に示してある。

分類			小学校			
			第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
全体			対象学年としない			18
基礎 活用	基礎	基礎 C	対象学年としない			5 (27.8%)
		基礎 B	対象学年としない			6 (33.3%)
	活用	活用 A	対象学年としない			4 (22.2%)
		活用 S	対象学年としない			3 (16.7%)
観点	知識・技能		対象学年としない			3 (16.7%)
	思考・判断・表現		対象学年としない			15 (83.3%)
	主体的に学習に取り組む態度		対象学年としない			
領域	言語事項		対象学年としない			3 (16.7%)
	話すこと・聞くこと		対象学年としない			2 (11.1%)
	書くこと		対象学年としない			3 (16.7%)
	読むこと		対象学年としない			10 (55.6%)

中学校			
第1学年	第2学年	第3学年	
対象学年としない		2,056人	児童・生徒
		23校	学校

中学校			分類		
第1学年	第2学年	第3学年			
対象学年 としない		16	全体		
		4(25.0%)	基礎C	基礎	基礎 活用
		5(31.3%)	基礎B		
		4(25.0%)	活用A	活用	
		3(18.8%)	活用S		
		2(12.5%)	知識・技能		観点
		14(87.5%)	思考・判断・表現		
			主体的に学習に取り組む態度		
		2(12.5%)	言語事項		領域
		2(12.5%)	話すこと・聞くこと		
		3(18.8%)	書くこと		
		9(56.3%)	読むこと		

②算数・数学科 ※全体に占める設問割合を（ ）内に示してある。

分類			小学校						
			第3学年	第4学年	第5学年	第6学年			
全体						25			
基礎 活用	基礎	基礎 C	対象学年 としない			7 (28.0%)			
		基礎 B				10 (40.0%)			
	活用	活用 A				6 (24.0%)			
		活用 S				2 (8.0%)			
観点	知識・技能					対象学年 としない			15 (60.0%)
	思考・判断・表現								10 (40.0%)
	主体的に学習に取り組む態度								
領域	A 数と計算					対象学年 としない			10 (40.0%)
	B 図形		9 (36.0%)						
	C 変化と関係		4 (16.0%)						
	D データの活用		2 (8.0%)						

③外国語 ※全体に占める設問割合を（ ）内に示してある。

分類			小学校							
			第3学年	第4学年	第5学年	第6学年				
全体										
基礎 活用	基礎	基礎 C	対象学年 としない							
		基礎 B								
	活用	活用 A								
		活用 S								
観点	知識・技能						対象学年 としない			
	思考・判断・表現									
	主体的に学習に取り組む態度									
領域							対象学年 としない			

中学校			分類		
第 1 学年	第 2 学年	第 3 学年			
対象学年 としない		25	全体		
		6 (24.0%)	基礎 C	基礎	基礎 活用
		11 (44.0%)	基礎 B		
		6 (24.0%)	活用 A	活用	
		2 (8.0%)	活用 S		
		16 (64.0%)	知識・技能		観点
		9 (36.0%)	思考・判断・表現		
			主体的に学習に取り組む態度		
		11 (44.0%)	数と式 A		領域
		7 (28.0%)	図形 B		
		4 (16.0%)	関数 C		
		3 (12.0%)	データの活用 D		

中学校			分類		
第 1 学年	第 2 学年	第 3 学年			
対象学年 としない		25	全体		
		6 (24.0%)	基礎 C	基礎	基礎 活用
		11 (44.0%)	基礎 B		
		5 (20.0%)	活用 A	活用	
		3 (12.0%)	活用 S		
		17 (68.0%)	知識・技能		観点
		8 (32.0%)	思考・判断・表現		
			主体的に学習に取り組む態度		
		5 (20.0%)	聞くこと ア		領域
		11 (44.0%)	話すこと イ		
		5 (20.0%)	読むこと ウ		
		4 (16.0%)	書くこと エ		

イ 意識・実態調査（学習・生活についてのアンケート）

① 自己意識・生活実態

領域	観点	設問数
自己意識	学校生活の充実度	4
	自己効力感(自由の感度)	6
	他者への受容(相互承認の感度①)	3
	他者からの受容(相互承認の感度②)	4
	自己の受容(自己承認の感度)(自己肯定感)	3
	探究の情動(内発的な学習意欲)	3
	主体的な学び(内発的な学習意欲)	4
	時間的展望	3
	道徳的実践力	5
	生命尊重体験	3
	国際社会への関心・関わり	3
	住んでいる地域への関心・関わり	4
集合的(社会)効力感 (相互承認(触発)の感度③)	4 ※全て複数領域に該当する設問	
生活実態	基本的な生活習慣	4
計		53

②学習状況、部活動への所属状況

観点		設問数
学習 状況	学習成果の実感	2
	学び方(学習方略一般)	6
	個別の学び(学びの個別化)	7
	探究の学び(学びの探究化)	3
	協同の学び(学びの協同化)	7
	読書冊数	1
	学習時間	4 ※平日/休日、自己/塾・家庭教師等
	学びの構造転換(国語科)	5
	学びの構造転換(算数・数学科)	5
	学びの構造転換(理科)	5
	学びの構造転換(外国語)	5
	コミュニケーション活動	1 ※小学校第6学年 4 ※中学校第3学年
	ICT利活用	6
	部活動への所属状況	1 ※中学校第3学年のみ
計	58～61	

③ 「杉並区教育ビジョン 2012」が掲げる「目指す人間像」「育みたい力」と
自己意識・生活実態領域の観点の関連

杉並区教育ビジョン 2012		意識・実態調査
目指す人間像	育みたい力	自己意識・生活実態領域の観点
夢に向かい、志をもって 自らの道を拓く人	1 自分のもち味を見付け、 自ら学び、考え、判断し、 行動する力	主体的な学び(4) (内発的な学習意欲) 探究の情動(3) (内発的な学習意欲) ☆自己効力感(6) (自由の感度)
	2 変化の時代を捉え、 たくましく生きる 心と体の力	☆自己の受容(3) (自己承認の感度)(自己肯定感) 時間的展望(3) 基本的な生活習慣(4)
	5 持続可能な社会を目指し、 次代を共に支えていく力	国際社会への関心・関わり(3) 住んでいる地域への関心・関わり(4) ☆集合的(社会)効力感(4) (相互承認(触発)の感度③)
地域・社会・自然と共に生きる人 「かかわり」を大切にし、	3 豊かな感性をもち、 感動を分かち合う力	生命尊重体験(3) ☆他者への受容(3) (相互承認の感度①)
	4 他者の存在を認め、 多様な関係を結ぶ力	☆他者からの受容(4) (相互承認の感度②) 道徳的実践力(5)

学校生活
の充実度
(4)

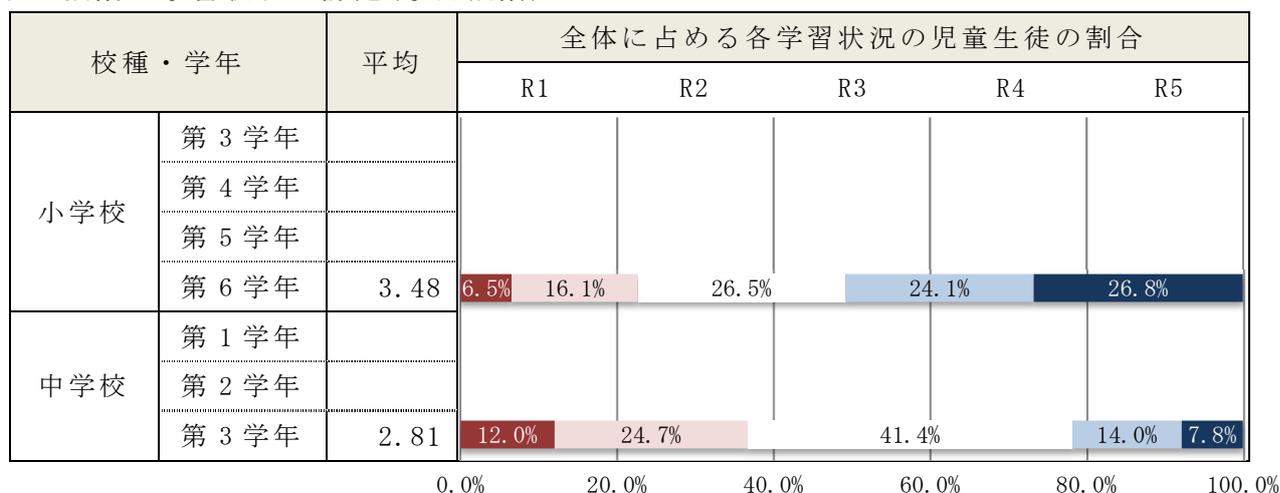
※ () 内の数値は、各領域に含まれる質問項目数を示す。

※ ☆ は、各目指す人間像・育みたい力において中核となる概念を示す。

Ⅱ 調査結果の概要

1 国語科 特定の課題に対する調査

(1) 5段階の学習状況の評定(学力段階)



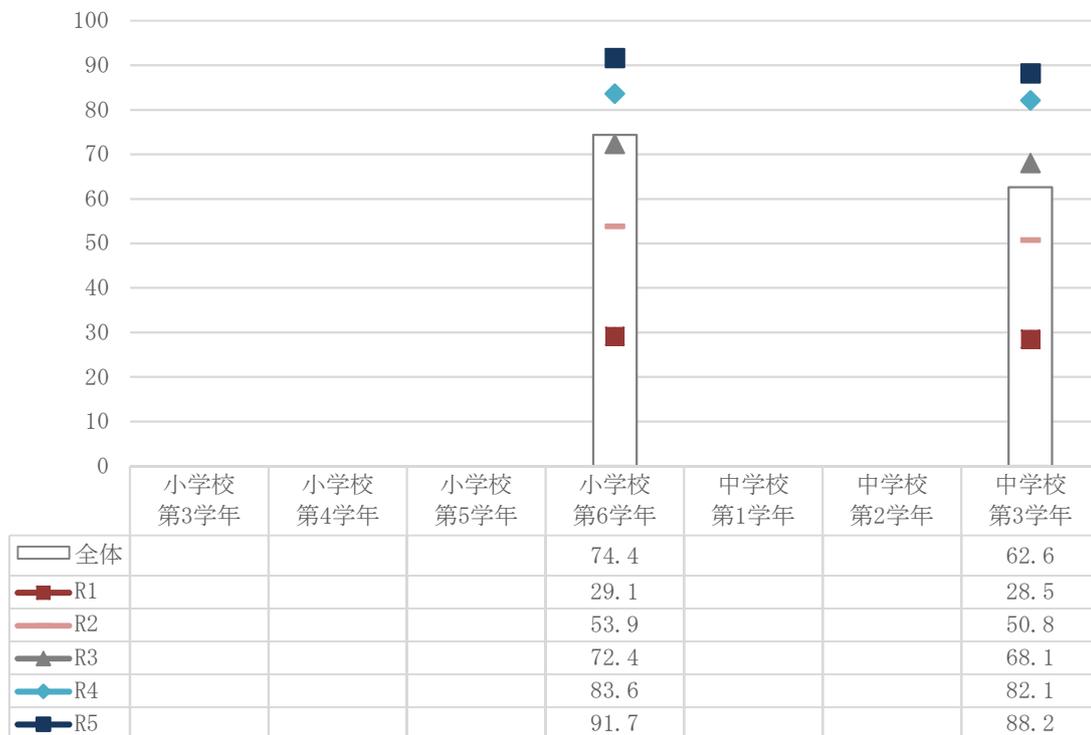
※学習指導要領に準拠した調査実施の前学年の学習状況の評定(学力段階)
 R5 発展的な力が身に付いている R4 十分定着がみられる
 R3 おおむね定着がみられる(最低限の到達目標)
 R2 特定の内容でつまずきがある R1 学び残しが多い

(3) 基礎・活用別、観点別、領域別の平均正答率 ※()内は標準偏差を示す。

分類			小学校				
			第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	
全体						74.4(18.3)	
基礎 活用	基礎	基礎 C・B				83.0	
	活用	活用 A・S				61.0	
観点	知識・技能					92.2	
	思考・判断・表現					70.9	
	主体的に学習に取り組む態度		対象学年としない				
領域	言語事項					92.2	
	話すこと・聞くこと					86.0	
	書くこと					59.5	
	読むこと					71.3	

※平均正答率や標準偏差の単純な比較は、難易度の高低や正答率を代表指標としない調査の特性(p.5)上推奨しない。

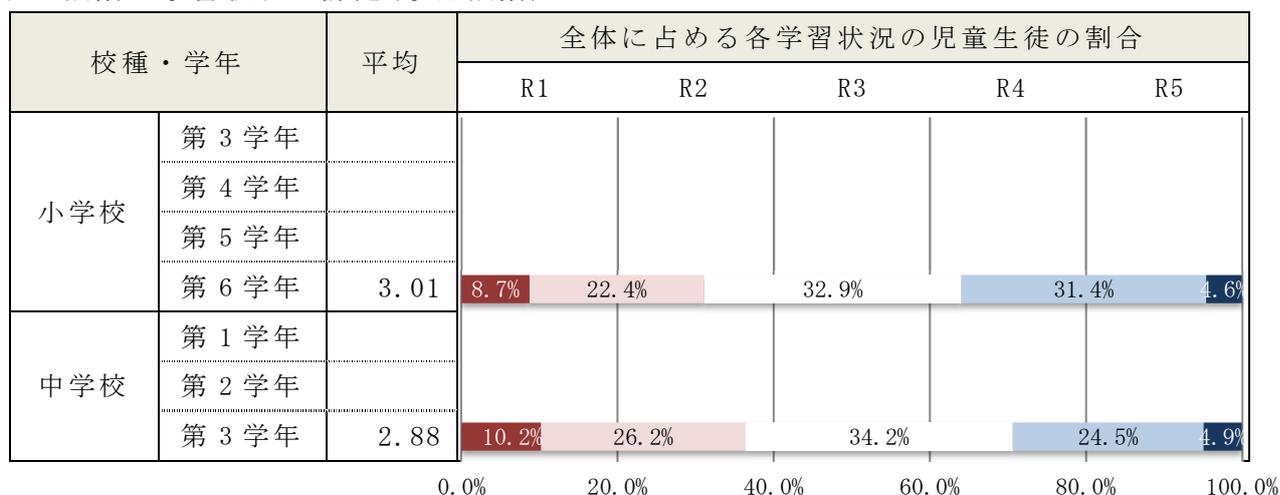
(2) 学習状況の評定(学力段階)ごとの平均正答率(教科全体)



中学校			分類		
第1学年	第2学年	第3学年			
対象学年としない		62.6(18.1)	全体		
		74.2	基礎 C・B	基礎	基礎
		47.7	活用 A・S	活用	活用
		75.1	知識・技能		観点
		60.8	思考・判断・表現		
			主体的に学習に取り組む態度		
		75.1	言語事項		領域
		81.0	話すこと・聞くこと		
		50.0	書くこと		
		59.9	読むこと		

2 算数・数学科 特定の課題に対する調査

(1) 5段階の学習状況の評定(学力段階)



※学習指導要領に準拠した調査実施の前学年の学習状況の評定(学力段階)

R5 発展的な力が身に付いている R4 十分定着がみられる

R3 おおむね定着がみられる(最低限の到達目標)

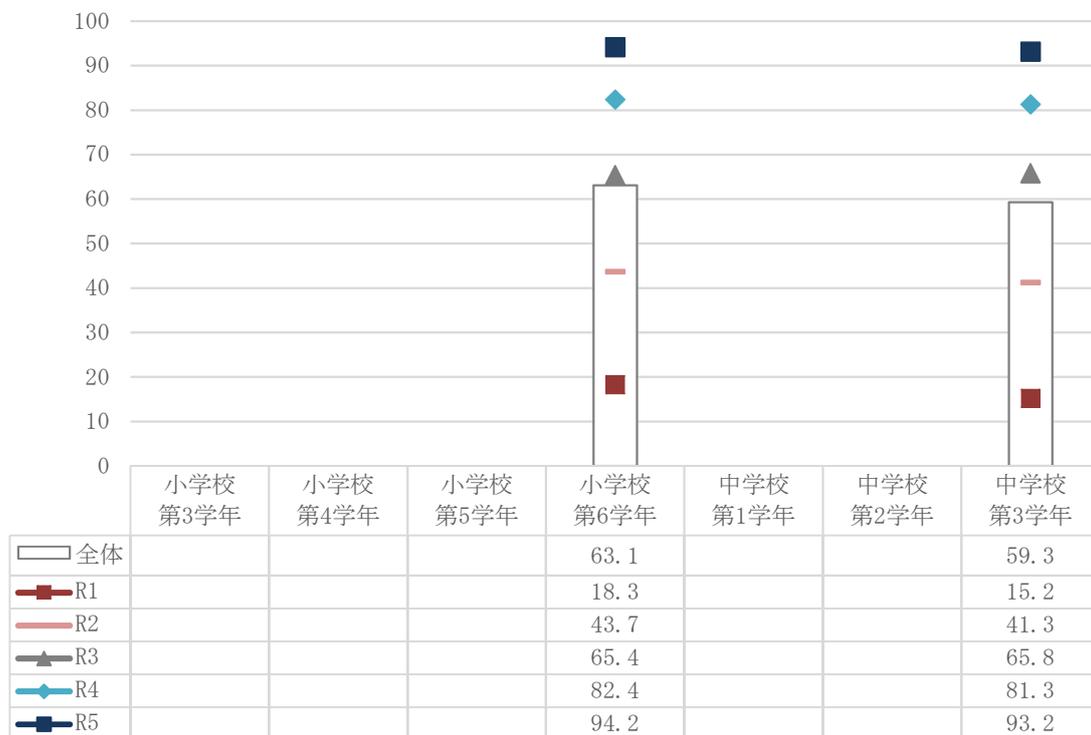
R2 特定の内容でつまずきがある R1 学び残しが多い

(3) 基礎・活用別、観点別、領域別の平均正答率 ※()内は標準偏差を示す。

分類			小学校			
			第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
全体						63.1(21.7)
基礎 活用	基礎	基礎 C・B				74.7
	活用	活用 A・S				38.4
観点	知識・技能					75.9
	思考・判断・表現					43.8
	主体的に学習に取り組む態度		対象学年としない			
領域	A 数と計算					67.6
	B 図形					60.9
	C 変化と関係					49.5
	D データの活用					77.2

※平均正答率や標準偏差の単純な比較は、難易度の高低や正答率を代表指標としない調査の特性(p.5)上推奨しない。

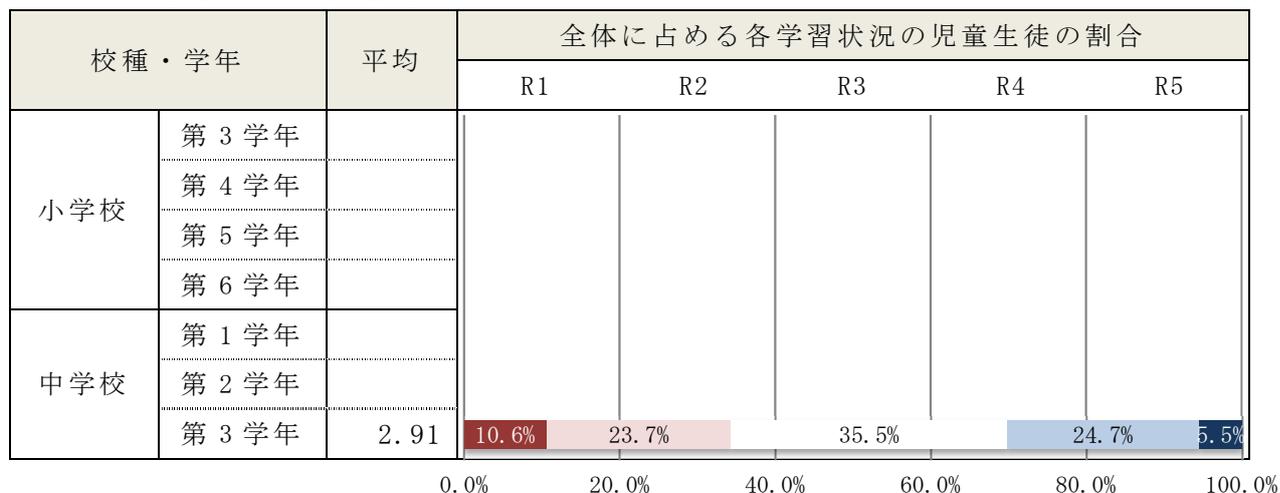
(2) 学習状況の評定(学力段階)ごとの平均正答率(教科全体)



中学校			分類		
第1学年	第2学年	第3学年			
対象学年としない		59.3 (22.8)	全体		
		72.4	基礎 C・B	基礎	基礎
		31.7	活用 A・S	活用	活用
		72.8	知識・技能		観点
		35.5	思考・判断・表現		
			主体的に学習に取り組む態度		
		67.4	数と式 A		領域
		50.5	図形 B		
		51.0	関数 C		
		61.6	データの活用 D		

3 外国語 特定の課題に対する調査

(1) 5段階の学習状況の評定(学力段階)



※学習指導要領に準拠した調査実施の前学年の学習状況の評定(学力段階)

R5 発展的な力が身に付いている R4 十分定着がみられる

R3 おおむね定着がみられる(最低限の到達目標)

R2 特定の内容でつまずきがある R1 学び残しが多い

(3) 基礎・活用別、観点別、領域別の平均正答率 ※()内は標準偏差を示す。

分類			小学校			
			第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
全体						
基礎 活用	基礎	基礎 C・B				
	活用	活用 A・S				
観点	知識・技能					
	思考・判断・表現					
	主体的に学習に取り組む態度					
領域	ア 聞くこと					
	イ 話すこと					
	ウ 読むこと					
	エ 書くこと					

対象学年としない

※平均正答率や標準偏差の単純な比較は、難易度の高低や正答率を代表指標としない調査の特性(p.5)上推奨しない。

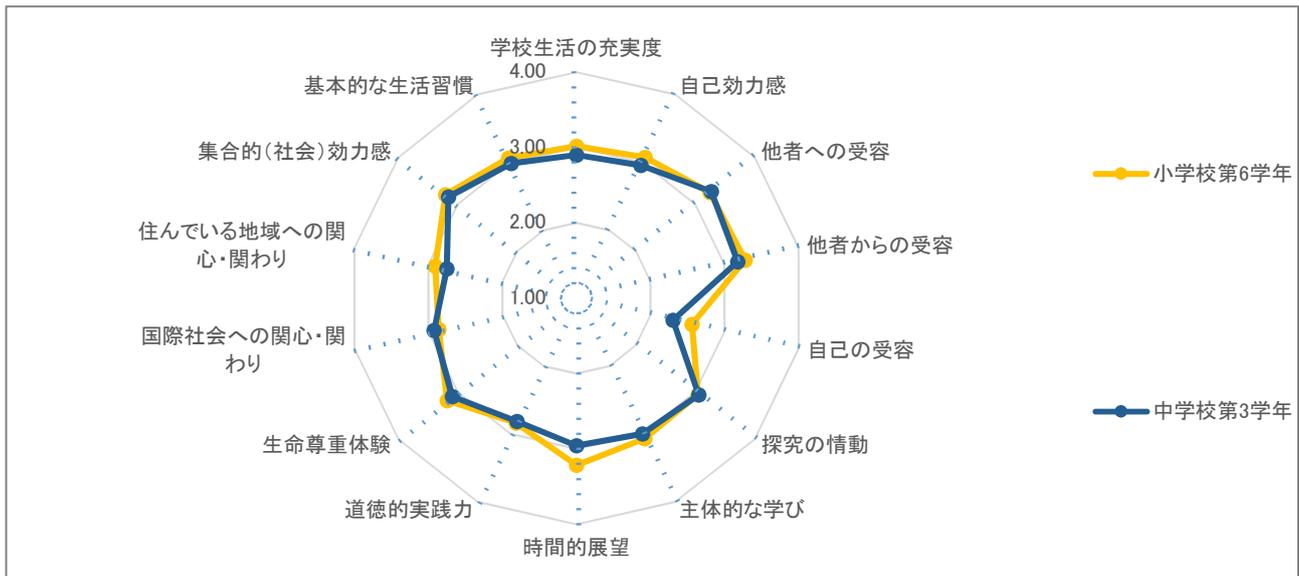
(2) 学習状況の評定(学力段階)ごとの平均正答率(教科等全体)



中学校		分類
第1学年	第2学年	
対象学年としない		54.4 全体
		59.7 基礎 C・B
		43.1 活用 A・S
		59.7 知識・技能
		43.1 思考・判断・表現
		主体的に学習に取り組む態度
		61.8 聞くこと ア
		56.1 話すこと イ
		61.0 読むこと ウ
		32.4 書くこと エ

4 学習・生活についてのアンケート 意識・実態調査

(1) 自己意識、生活実態に係る観点の平均値



観点		小学校				中学校				
		第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	第1学年	第2学年	第3学年		
自己意識	学校生活の充実度	対象学年 としない				対象学年 としない			3.02	2.90
	自己効力感 (自由の感度)								3.08	2.96
	他者への受容 (相互承認の感度①)								3.25	3.27
	他者からの受容 (相互承認の感度②)								3.28	3.18
	自己の受容 (自己承認の感度)(自己肯定感)								2.56	2.30
	探究の情動 (内発的な学習意欲)								3.05	3.06
	主体的な学び (内発的な学習意欲)								3.07	3.00
	時間的展望								3.22	2.96
	道徳的実践力								2.84	2.81
	生命尊重体験								3.18	3.09
	国際社会への 関心・関わり								2.86	2.93
	住んでいる地域への 関心・関わり								2.91	2.75
集会的(社会)効力感 (相互承認(触発)の感度③)	3.21	3.16								
生活実態								3.07	2.99	

※回答を肯定=4~否定=1と換算し、各領域に含まれる項目の回答結果を平均した値